

リーダーシップという言葉がよく使われる。そもそも、リーダーシップとは何か。例えば100人が集まる組織がある。その組織が厳しい状況に直面して、100人のうち、99人が「もうだめだ」と言ったとする。そのときに、もし、たった一人「いや、まだ勝負は終わっていない」そう言える人がいたら、その人がリーダーであろう。

なぜなら、リーダーシップの本質とは、その組織や人間集団の可能性を信ずる力だからである。それにもかかわらず、リーダーの多くが、この信ずる力ということの大切さを忘れてしまっていないだろうか。

では、どうすれば、信ずる力を身につけることができるのか。この問いがむずかしい。なぜなら、信じるという行為は、努力してできるものではないからである。いくら、「よし、信じよう」と考えても、何かを本当に信じることはむずかしい。

それはなぜか。無意識だからである。信じるというのは、無意識だからである。例えば、厳しい状況に直面したとき、表面意識で「絶対、大丈夫、大丈夫」と信じようと思っても、無意識の世界に「本当に大丈夫だろうか」とつぶやく自分がある。「少しも大丈夫ではない」と叫ぶ自分がある。この状態というのは、表面意識では信じているつもりでも、無意識では信じていない。そのため、この状態では、本当の信ずる力は発揮できない。

本来、信ずるという行為は、全身全霊、心の深いところ、無意識の世界まで含めて、何かを信じている状態となることである。この状態を信じていると呼ぶわけである。だから、むずかしい。信じるというのは、努力の問題ではない。ある意味で、才能である。もちろん、この信ずる力というものは、長年にわたる成功体験の積み重ねによっても、身につけていくことはできる。だが、やはり才能なのである。

例えば、プロ野球における伝説のスーパースターである長嶋茂雄さんの場合である。彼は、現役時代、打席に立つと、いつも思っていた。全打席、ホームランが打てると思っていた。真偽のほどはわからないが、ありそうな話である。どのような状況、どのような場面においても、自分の最高の能力を発揮できると信じ込める。これは、すごい才能である。だから、彼は天才と呼ばれる。彼のもつポジティブな精神、全打席、ホームランが打てると、本気で信じ込める精神、それこそが天才の証である。

同様に、リーダーが、将来性をどこまでもポジティブに信じ込めるということ、それはすばらしい才能である。そうしたリーダーは、自らの語る言葉そのものを深く信じている。それゆえ、語る言葉には、自ずから言霊が宿る。信ずる力、それがリーダーの語る言葉に言霊が宿るための最も大切な条件である。